

# 私の戦争体験

聞き書き

連載 ①

「北茨城・九条の会」準備会では、市民の皆様の戦争体験と平和への思いをニュースに連載して、憲法9条を守る力にしていきたいと思ひます。第1回は「九条の会」づくりに賛同頂いている滝さんご夫妻(平瀧町在住)からお話を伺いました。(表題と見出しは事務局でつけました)

## 動かしようのない事実

〔平瀧町・滝 孝太郎さんのお話〕(現在83歳)

中国での日本軍

私は大正13年7月生まれです。昭和19年11月20日に徴兵されて水戸2連隊に配属され、北支に行きました。ここで3ヶ月間教育を受けて、すぐに討伐隊に引っ張り出されました。

初年兵は上から言われるままだから、何のためかよくわからないけれども、中国人の家を焼いたり、ところかまわず銃を撃ったりしました。軽機関銃を持って山の上から中国人を狙撃しました。鶏を取り上げて料理をさせられ、「ああ、鶏はこういうふうに料理するのか」と軍隊に入って初めて知りました。日本軍が入っていくと、婦女子は姿を隠して一人もいなくなりまし



シベリアの捕虜収容所

た。それは日本兵に強姦されるのを恐れたからです。今になって従軍慰安婦に軍は関与しなかったなどと言っている人達がありますが、とんでもないでたためです。兵隊が現地の婦女子を強姦するから、軍部が従軍慰安婦をつくったのです。

昭和20年5月に外蒙古へ移動して、毎日爆雷を持って戦車攻撃の練習をさせられましたが、8月9日にソ連が日本に宣戦布告し満州に侵入してきました。私たち兵隊は貨車に乗せられて奉天に向かいました。ソ連の飛行機に何回となく機銃掃射されて、たびたび汽車が動かなくなったこともありましたが、何とか奉天に着きました。

そこには満蒙開拓団の方々がどんどん逃げてきていましたが、貨車にやってきて「兵隊さん、日本は負けたんだよ。天皇陛下が放送したよ」と教えてくれて、それで初めて戦争に負けたことを知りました。軍部からは一切知らされずにいたので、本当にびっくりしました。政府も軍部も「正義だ!正義だ!」と言っていました。実際には侵略で、これに抗した中国人が正義でした。だから、終戦を知らされたときは、正直なところホッとしたところがありました。

満蒙開拓団の多くの人たちは貨車に乗り切れず、また救済の手も入ることなく現地に取残されて様々な悲劇に見舞われたことは後で知りましたが、残留孤児問題の原因ともなり、本当に残念なことでした。

酷寒のシベリア

そうしているうちに、私たち兵隊は侵入してきたソ連軍によって武装解除され、身柄を拘束されました。腕時計などの貴重品はソ連兵に取られました。食べるものがなく、身に着けていたものを一つひとつ剥いでは食糧と交換して何とかしのぎまして、秋になれば日本に帰れるものと思っていました。

ところが10月ごろだったでしょうか、その思いとは違って、私たち日本兵はソ連軍に連行されて逆に北上し、北海の方へ連れて行かれたのです。途中、バイカル湖の水で飯盒炊飯したりしました。11月だったと思いますが、シベリアに着いてチュウレンホーボーという町の収容所に入れられました。

そこには石炭の露天掘りがあり、私たちは石炭を掘る強制

No.2  
07.04.24

## 北茨城・九条の会 ニュース

発行：北茨城・九条の会(準備会)  
連絡先：  
<http://go.gob.jp/go/9>

「北茨城・九条の会」に賛同いただいた皆さんお届けします。お問い合わせにも広げて下さい。話題やご意見お待ちしております。

労働に駆り出されました。11月ごろはまだ良かったのですが、12月に入ると温度は零下30℃くらいになり、さらに零下40～50℃まで下がることもあり。さすがに50℃になると仕事はさせませんでした。じいっとしていると凍傷にかかりますので、絶えず鼻や唇など顔をこすったり手足を動かしていました。凍傷で亡くなる人も出ました。真冬は地下炭鉱に入って石炭掘りをやらされましたが、いつ落盤するかわからない不安の中で働き、本当に怖い思いをしました。

旋盤工や大工・左官などの技術のある人はまだ良かったが、私のように手に技術のないものは、毎日石炭掘りのノルマがあつてそれを達成しないと帰れず、本当に辛い目に遭いました。食事といえば、飯盒のふた程度の量のコーリヤンや燕麦、それにパン一切れ。砂糖は少しありましたが、タバコも配給でした。体力はなくなる一方で、その上みんなお腹をやられたり、また発疹チブスで倒れました。亡くなる人がいても、我々にはけつして知らされませんでした。

勝手な政治家

このような死と背中合わせの苦しみをくぐり抜けて、やっと昭和22年5月1日に「明優丸」という

引き揚げ船で舞鶴に帰ってきました。

戦争はもう2度としてはなりません。いま、安倍首相をはじめ、戦争の体験のない2世・3世議員たちが中心になって、「憲法改正」だの「血を流しても国際貢献を」などと勝手なことを言って、日本がアメリカの戦争と一緒に参加するような方向に持っていこうとしています。こういう人たちに私たちの体験を聞かせてやりたいです。

私たち元シベリア抑留者が強いられた奴隷のような労働へ

## 米軍機から機銃掃射、母が命がけで

〔平潟町・滝 信子さんのお話〕（現在81歳）

車窓に  
よろい戸

私は大正15年5月27日生まれです。高等小

学校を卒業して日立製作所に勤めていました。昭和16年12月8日に、工場の中で「戦争が始まったんだって」と真珠湾攻撃のことは聞きました。その頃は余りピンとはきませんでした。

その後水戸に出て、助産婦・看護婦・養護教員を養成する愛国助産女学校に入学し、寄宿生活をしていました。そういう勉強でしたので、戦争中も許可されていたのです。そこで米軍の空襲に遭い、その度に防空壕に逃げ込みました。



高等小学校の卒業写真

の国家補償問題は自民・公明などの与党によってないがしろにされてきました。私たちが捕虜にされたことは誰にも動かしようのない事実です。それによって強いられた労働に対する対価がまだ支払われていないことは人権・人道上の問題です。かけがえのない青春を奪い、戦争の犠牲にされた責任を生きている限り追及していきます。軍隊は人殺しが仕事です。私たちが体験した悲惨な出来事を孫子が繰り返さないためにも、生涯をかけて、憲法9条を守り貫きたいと思います。

本土空襲も頻繁になり、食糧事情も悪く、落ち着いて勉強できる状況ではなくなりましたが、20年3月に卒業して、実家の南中郷に帰りました。汽車は少なく切符もなかなか買えませんでした。やっと買えてホームに出ましたが、汽車は満員でした。どこかのおじさんに窓から押し上げて頂いて、ようやく乗ることができました。

日立あたりまで帰ってきますと、窓のよろい戸を閉めさせられました。その時は、何のためか理由が分からなかったのですが、戦後、大津町に風船爆弾の放流基地があったからだ聞いてびっくりしました。それを一般の人に見られたくなかったのでしょうか、軍部はそれほど国民を信頼できなかったのでしょうか。

実家では、どこからかドーン、ドーンと大きな砲声が聞こえてきて怖い思いをしましたが、それは艦砲射撃だったそうで、食べ物を持って山のほうへ逃げたこともあります。母と畑仕事をしましたが、米軍による空襲が多くなり、ある時ダッダッ、ダッダッと機銃掃射で狙われました。母は私の上に負いかぶさって、自分の命を捨てても私を助けようと思いました。今でも母を思うと、そのことを思い出します。

いびつな  
時代

8月15日の終戦の日、集まってみんなと一緒に放送を聞きましたが、それまでは「神国」だとか言って、必ず勝つと思われてきましたから、本当にがっかりして地べたに座り込んでしまいました。その後、米軍が進駐してくると、女性はアメリカへ連れて行かれるというような噂が流れて怖い思いをしました。



## 「北茨城平和の会」が 駅頭でチラシ配布

政党や団体に関わりなく誰でもが個人で参加できる組織として活動しているのが「北茨城平和の会」です。そのメンバーの人たちが中心になり、さる3月27、28、29日と連続して、大津港・磯原・南中郷の3つの駅頭でチラシ配布に取り組みました。

自民・公明が強行しようとしている国民投票法のねらいは憲法九条を変えて戦争をする国にすることだと訴え、協力共同を呼びかけました。受け取ったチラシを熱心に読んでくれる人が何人もいました。

（写真は南中郷駅前）

小学校の卒業写真を見ると、「尽忠報国」「挙国一致」「堅忍持久」など、戦争を推し進める当時の教育方針が高々と掲げられていました。また、英語は敵性語として使用も教育も禁止され、ドイツ語は同盟国の言葉として許可されていました。本当にいびつな時代だったと思います。

今また、安倍首相は「教育の場で愛国心を育てよう」などと盛んに言っています。憲法を変えて日本を戦争のできる国にしようとしている人たちは、また戦前のような教育を復活させたいと思っているのでしょうか。そういう教育や憲法改悪は御免です。憲法9条は必ず守らなければなりません。